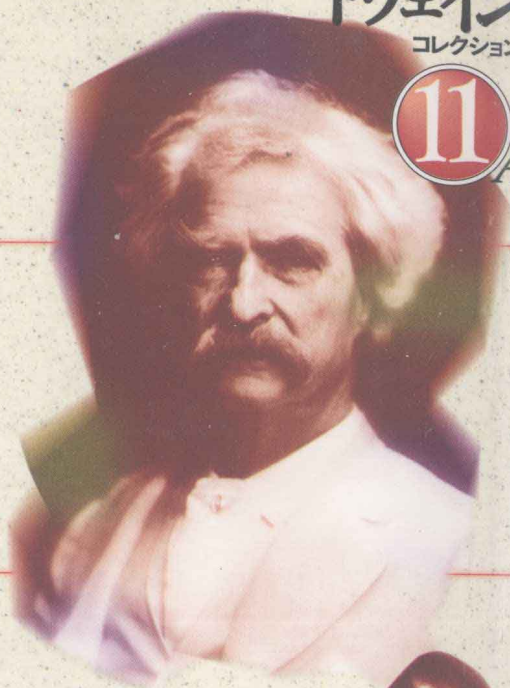


マーク
トウェイン
コレクション

11
A



Mark Twain Collection 11
A
Roughing It

訳 ★ 吉田映子 木内徹

西部放浪記 上

11_A

訳
★
吉田映子
木内
徹

部放浪記
上



江苏工业学院图书馆
藏书章

彩流社

《訳者略歴》

吉田 映子（よしだ あきこ）

東京外国語大学を経て、一橋大学大学院博士課程修了。

訳書、裁判記録シリーズ『情事』、『密会』（旺文社）、P J 傑作集『ありえない物語』、『がまんできない物語』（トバースプレス）、『ミシシッピの生活（上下）』（彩流社）。

訳詩集、『笑いのコーラス——イギリス滑稽詩画集』（トバースプレス）、『ねこねこ ねこがいっぱい』、『まじょ まじょ おばけもいっぱい』（大日本図書）。『そらには いっぱい』、『うみには いっぱい』、『もりには いっぱい』、『はたけに いっぱい』、『ゆめにも いっぱい』（架空社）

本書の第28章までを訳し、1997年1月2日、急逝

木内 徹（きうち とおる）

1953年、東京生まれ。横浜市立大学卒業、早稲田大学大学院博士課程修了。

現在、日本大学助教授。専攻／アメリカ文学、アメリカ黒人文学。

訳書、マイケル・オークワード著『アメリカ黒人女性小説一呼応する魂』（彩流社）。著書『黒人文学書誌』（弓プレス）『黒人作家事典』（弓プレス）。共著、『現代英米文学の担い手たちⅠ、Ⅱ、Ⅲ』（弓プレス）

せいふほうろうき

西部放浪記（上）——マーク・トウェイン コレクション 11-A

1998年11月25日 発行

定価は、カバーに
表示してあります

著 者 マーク・トウェイン

訳 者 吉 田 映 子

木 内 徹

発行者 竹 内 淳 夫

発行所 株式会社 彩 流 社

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2

電話03(3234)5931 FAX 03(3234)5932

組版 (有) ポイントナイン

印刷 (株) 平河工業社

製本 (有) 青木製本

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取替いたします

ISBN 4-88202-531-0 C0397

目次／西部放浪記
(上)

第一章 旅へのあこがれ 15

ネウファタの秘書官助手に任命される——満足しごく——一時間で荷造り——夢と幻想——ミズーリ川で——〈元氣者〉の船

第二章 駅馬車の旅の始まり 18

セントジョーゼフで——キッドの手袋、燕尾服との別れ——完全武装——〈合衆国〉を去る——われわれの馬車——目くばせと地震の間

第三章 西部の生き物 24

いかれたサラブレース——郵便は確実に配達——悪条件下の睡眠——セイジブラッシュ——食料品としての外套——ラクダの悲しい運命——新物試し屋への警告

第四章 駅での温かいもてなし 32

駅宿に到着——奇妙な場所にある前庭——敬服すべき宿の主人——異郷の王——スラムガリヨン——食卓の作法——メキシコ種の荒れラバ——駅馬車の旅と汽車の旅

第五章 砂漠で生きぬくコヨーテ 42

初対面——コヨーテ——犬の体験——犬はげんなり——コヨーテの親類——家を離れた遠くで食事

第六章 駅馬車路線の実力者 47

管区監督——警乗員——駁者——配下に教えこむ——われらが友ジャックと巡礼者——ベン・ホリデイとモーゼの比較

第七章 虚実皮膜のほら話 53

オーヴァーランドシティ——プラット川の渡河——ビーミスのバッファロー狩り——バッファローの襲撃——ビーミスの乗馬狂乱する——即興サーカス——驚くべき方法で脱出

第八章 ポニー・ライダーの勇姿 62

ポニー・エクスプレス——休みなしに五十マイル——「来たぞ！」——アルカリ水——雪崩の背にまたがり——インディアンによる殺戮

第九章 暗夜の銃声 67

インディアンのだななかで——優位に立ったのはずるい——武器を枕に——深

夜の殺人——無法者の怒り——危険だが有用な住人

第十章 無法者スレイドの素顔 73

スレイドの物語——ジュールズとの遭遇——無法者の天国——スレイド監督となる——刑執行者となる——捕虜——妻の勇気——スレイドと友達づきあい

第十一章 スレイドの最期 81

モンタナのスレイド——飲み騒いで——法廷で——判事を襲撃——自警団による逮捕——鉱山労働者の結集——スレイドの処刑——スレイドは臆病者だったか？

第十二章 ロッキー山脈の心臓部 90

ロッキー山脈のご真ん中——サウス峠——二手に別れる水流——山を下る——暗夜に道を失う——合衆国軍隊とインディアン——崇高な景色——天使たちにまじって

第十三章 ソルトレークシティのスケッチ 101

モルモン教徒と他教徒——興奮性飲料、ビームスへの効き目——ソルトレークシティ——きわだった対照——モルモンの一浮浪者——聖者と話す——へ国

王^レを訪問

第十四章 国王ブリガム・ヤングの裁き

106

モルモン教徒の契約者——ストリート氏に人々は驚嘆——ブリガム・ヤングに
提訴、彼の処置はいかに——新たな観点から見た複婚制

第十五章 ブリガムの悩み多き結婚生活

110

ある他宗徒の私室——複婚論議——愛妻とD4——引退した妻たちの養鶏場——
——子どもには名札が必要——捨て子の父となる——大家族のベッド

第十六章 モルモン教典を精読すれば

117

モルモンの聖典——その神性の証明——著者らによる剽窃——ニーファイの物
語——すさまじい闘争——キルケニーの猫も顔負け

第十七章 値段は西高東低

129

あらゆる問題に三面が——なにもかもが二十五セント——ケチくさくしなびた
——移住者と白シャツは侮られ——^{フーラー・ヤングス}へ四十九年組——額面以上で——真の幸
福

第十八章 アルカリ砂漠の苛酷な現実 134

アルカリ砂漠——砂漠行のロマンは吹きとび——アルカリ塵——ラバへの影響——あまねき感謝

第十九章 インディアンの評価を下方修正 138

ディガー・インディアンとアフリカのブッシュマンの比較——食、生活、特徴——駅馬車への卑劣な襲撃——勇氣ある馭者——高貴な赤肌の人

第二十章 最強不朽の小話 142

グレート・アメリカン・デザート——骨を踏んでの四十マイル——流出口のない湖——グリーリーの赫々たる馬車の旅——高名の馭者ハंक・モンク——話をへ封じることの致命的結果——頭の禿げた小話

第二十一章 新天地での新しい生活 150

アルカリ塵——カーソンシティ——旅の終り——ワシヨの西風のたわむれ——準州役場——われらがフランス系の女主人ブリジエット・オフラニガン——あやしの影——測量調査隊

第二十二章 タホー湖畔の所有地 160

大富豪の息子——タホー湖へ出発——みごとな景観——湖を渡る——野外の
キャンプ——元氣回復の氣候——所有權の確保——付屬建築物と囲い

第二十三章 タホー湖の景觀 165

幸せな生活——タホー湖とその風情——水の透明さ——破局——火事だ！火
事だ！——ふたたび宿なしに——湖に逃げだす——嵐——カーソンへの帰還

第二十四章 純メキシコ種ブラグの武勇談 171

馬を買う決心——カーソンの馬術——誘惑——氣前のいい助言——初めての騎
乗——たいしたバック屋——売却の試み——手出しの費用

第二十五章 準州新政府の惡戦苦闘 178

ネヴァダのモルモン教徒——準州初期の歴史——銀鉱の発見——準州新政府——
指示書と領收証——通行料徴収所

第二十六章 銀鉱熱に煽られる 184

銀鉱熱——市況——銀塊——とびかう噂話——フンボルト鉱山へ出発

第二十七章 いざ宝の山へ 190

わが一行の流儀——旅の出来事——温かいが気安すぎる同床の友——ミス
ター・バルーの抗議——雲の中の陽光——安着

第二十八章 はじけ散った皮算用 195

山奥に着く——小屋を建てる——わが初の金鉱——吉報を小出しに伝える——
バブルに穴が——光るもの必ずしも金ならず

第二十九章 銀鉱山へ 202

探索に出かける——ついに銀鉱山——ハンマーと掘削機で一財産を——困難な
旅の道——払い下げ請求地を持つ——岩だらけの国

第三十章 洪水 208

損を承知で売ってくれる友——いかに〈権利〉は売られたか——坑道を掘るの
をやめる——エスメラルダへの旅——わたしの仲間——インディアンの予言——
洪水——そのあいだの顛末

第三十一章 閉じこめられて 214

へハニーレイクスミス」の客——へあの意地悪なアーカンソー——へ哀れな

亭主——喧嘩の決意——亭主の妻——意地悪な暴れんぼう負ける——再出発
——カーソン川を渡る——危機一髪——自分の足跡を追う——新案内人——雪
に迷う

第三十二章 雪中行軍

224

絶望的な状況——火を起こす努力——馬は去る——マッチを見つける——一本、
二本、三本、最後の一本——火起こらず——死が決定的に——悪徳の人生を深
く反省する——悪癖を捨てる——お互いを許す——心やわらぐ別れ——忘却の
眠り

第三十三章 晴れてみれば

229

意識の回復——ばかばかしい展開——駅宿——気分回復——悔悟の裏り——悪
癖の復活

第三十四章 大地滑り事件の判決

233

カーソンについて——バンコーム長官——ハイド対モーガン——ハイドはいか
にして牧場を失ったか——大地滑り事件——裁判——バンコーム長官法廷へ——
すばらしい決定——慎重な考慮

第三十五章 ナイ隊長の機知 239

新しい旅の仲間——旅館は満員——ナイ隊長がいかに部屋をみつけたか——出
発を惜しまれる——坑道の使用——明らかな例——「払い下げ請求地」の仕事
を始め失敗——どん底

第三十六章 退屈な仕事 243

石英精練所——融合——「廃石漉し」——ネヴァダで最初の石英精練所——熱
処理含有量分析——賢い含有量分析家——給料の増額要求

第三十七章 秘密の探索行 249

ホワイトマンのセメント鉱石——発見の物語——秘密の探索行——夜の冒険——
——苦しい位置——失敗と一週間の休日

第三十八章 モノ湖探検 256

モノ湖——シャンプーが容易に——犬の無思慮な行動とその結果——アルカリ
液——湖の興味ある事物——無料のホテル——少々誇張された面白い出来事

第三十九章 モノ湖探検その後 261

モノ湖の二島へ——灰と荒廃——死の世界のなかの命綱として船は浮かぶ——

命がけの飛び込み——モノ湖の嵐——大量の石鹼水——地質学的に珍しいもの——シエラ山脈の一週間——妙な爆発から辛くも逃れる——「ストープ、ぜんぶ、ない！」

第四十章 大金持ちの夢

267

ヘワイドウェストン社の鉱山——ヒグビーの〈探訪〉——隠れ鉱脈——百万ドルの価値——ついに大金持ちに——将来の夢

第四十一章 元のもくあみ

276

リューマチの患者——白日夢——不幸なつまづき——わたしは突然去る——もう一人の患者——小屋のなかにいたヒグビー——夢の風船破裂——無価値——後悔と解説——三人目の仲間

第四十二章 新聞記者になる

283

次はなにを？——障害——〈餅屋は餅屋〉——ふたたび鉱山へ——自分に泥をかける——現地記者に——かなりの成功

第四十三章 記者仲間

290

友人のボグズ——学校の報告——わたしに借りを返すボグズ——ヴァージ

第四十四章 バブルの時代 297

好景気時代——株の山——編集上のごまかし——わたしがもらった株——鉾山の記事に味付け——新規まき直しをする悲劇役者

第四十五章 金の使い道に困る 304

好景気時代つづく——衛生委員会基金——人々の熱狂——寄付が待ちきれない——衛生委員会の小麦粉の袋——袋、ゴールドヒルとデイトンに運ばれる——ヴァージニアシティでの最後の競り——競りの結果——最終総額

西部放浪記
(上)

原註の表記は短いものは〔原註：〕、長いものは＊印で表記し、訳註は（ ）で示した。